

令和2年度 川崎市岡本太郎美術館

事業報告・評価書

川崎市岡本太郎美術館

目 次

| | | |
|---|-------------------------------------|----|
| 1 | 展覧会事業 | |
| | (1) 企画展 | |
| | ① 「音と造形のレゾナンスー バシエ音響彫刻と岡本太郎の共振」展 | 1 |
| | ② 「高橋士郎 古事記展 神話芸術テクノロジー」展 | 3 |
| | ③ 「クルト・セリグマンと岡本太郎」展 | 5 |
| | ④ 「第24回岡本太郎現代芸術賞 (TARO 賞)」展 | 7 |
| | (2) 常設展 | |
| | ① 「太陽の塔への道～太陽の塔は「生命の樹」だった」展 | 9 |
| | ② 「うちの中の岡本太郎」展 | 10 |
| | ③ 「岡本太郎と旅」展 | 11 |
| 2 | 資料収集・整理、調査研究 | 13 |
| 3 | 作品の保存・修復、貸出 | 14 |
| 4 | 普及企画 | 16 |
| 5 | 広報活動 | 25 |
| 6 | 施設・設備の整備 | 27 |

令和2年度事業報告について

1 展覧会事業

(1) 企画展

| | |
|-----|--|
| 事業名 | ①「音と造形のレゾナンスーバシエ音響彫刻と岡本太郎の共振」展 |
| 会期 | 令和2年6月2日(火)～7月12日(日)(※会期開始は4月25日から変更) |
| 目標 | <p>岡本太郎は、芸術がすべての人と共有するものであるという理念を貫き、《太陽の塔》をはじめとする多くのパブリック作品を制作した。彼と同じく、誰でも自由に演奏することのできる楽器でありオブジェでもある「音響彫刻」という新しいスタイルを生み出した芸術家がフランソワ・バシエとベルナール・バシエの兄弟である。フランスで過ごした岡本太郎とバシエ兄弟。フランスの風土と文化が彼らの芸術観を育んだといえる。</p> <p>バシエ兄弟の作り上げた「音響彫刻」の造形美と音響は、世界的な評価を得てパリ装飾芸術美術館やMoMAなど世界各地の美術館で展示された。1970年の大阪万博には鉄鋼館ディレクターであった、作曲家・武満徹がフランソワ・バシエを招聘して鉄鋼館に展示された。芸術に対する心情を同じくする岡本太郎の《太陽の塔》とバシエ兄弟の「音響彫刻」は万国博覧会を舞台で偶然にも隣り合わせとなって多くの人々に共感を与えることとなったのだ。万国博覧会以後、鉄鋼館に保管されていた「音響彫刻」は、大阪府(当時・万博記念機構)、東京藝術大学、京都市立芸術大学が中心となり、当時と変わらぬ美しい造形美と音響を取り戻した。</p> <p>本展は、現在国内に存在するバシエの「音響彫刻」5点を一堂に集め岡本太郎の芸術空間で共演させるという試みである。</p> |
| 内容 | <p>本展では、大阪万博から50年を経て、現在までに修復を終えた5点のバシエ音響彫刻を一堂に集め、岡本太郎の作品とともに展示した。また会期中に音楽アーティストによる演奏会やワークショップなどのイベントを開催。《高木フォーン》《川上フォーン》《桂フォーン》《渡辺フォーン》《勝原フォーン》という、それぞれが個性的な造形を持つバシエ音響彫刻は、奏でる人によって無限の音色を発する楽器でもありオブジェでもある。岡本太郎の作品とともに展示することで、バシエと岡本の作品が共演する芸術的空間をお楽しみいただいた。</p> |

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

岡本太郎の芸術空間の中で、バシエの音響彫刻を展示し、オブジェとしての作品の魅力を紹介するとともに、会期中に音楽アーティストによる演奏を行い、音響彫刻としての可能性を拡げることができた。また、新型コロナウイルスの感染拡大防止のための休館期間中に、展示室内をVRで撮影し、音楽家による無観客演奏を動画で撮影した。VRや動画を美術館ホームページで公開することで、本展を広く一般に紹介することができた。また、会期中には、研究者による音響彫刻の調査・研究を推進し、音楽界や美術界での研究の発展に寄与することができた。

休館中に展示室をVR撮影し、5月8日(金)から美術館ホームページで配信した取り組みは、博物

館・美術館施設の中でも、いち早く行った試みであったため、新聞やテレビ（NHKの朝の情報番組）など多くの媒体で取り上げられることとなり、休館期間中を含め、多くの方にVRや3D画像で展示をご覧いただくことができた。

来館者アンケートからは、音響彫刻を実際に触れてみたかったとの声が多く寄せられた。本来は自由に演奏できる音響彫刻であるが、経年劣化がみられる作品を音楽家以外の方に触れていただくことはできないと判断し、一般の方は触れないようにしたためである。しかし、大阪万博の終了後、鉄鋼館に保管されたまま展示されることの無かった音響彫刻が、修復を経て本展で岡本太郎作品と共に一堂に展示されたことにより、音響彫刻本来の魅力を多くの方に知っていただいた結果だと考えている。

[関連事業]

・会場VRの公開

一般社団法人VR革新機構の協力により、展示室を高画質360度カメラで撮影し、会場VRを作成いただいた。本展会場のVRは美術館ホームページ内の「太郎VR美術館」として公開し、休館期間中に来館することができない多くの方に本展をVRや3Dビューでご覧いただいた。

・動画配信

関連イベントのうち、「アンサンブル・ソノーラ コンサート」とコンサート「武満徹『四季』の演奏会」について、休館中に無観客演奏を行い、動画を美術館ホームページで配信した。

・バシエ音響彫刻×《マリンバピンポン》演奏会

日時：7月4日（土） 14:00～14:45

演奏：安江佐和子（パーカッショニスト）、古賀優（パーカッショニスト）、卓球選手

参加人数 140名

・鈴木昭男 コンサート

日時：7月12日（日） 15:00～16:00

演奏：鈴木昭男(サウンド・アーティスト)

参加人数 323名

・会場音響 BASCHET with meditone®

AIが奏でるバシエ音響彫刻の音色が会場内にサウンドオブジェクトとして流れた。

期間：6月2日（火）～7月12日（日）

制作：山村寿一（digiart,Inc.）

[課題・反省等]

・関連イベントとして、スペインからアーティストを招聘し、演奏会とワークショップを開催する予定であったが、新型コロナウイルスの影響によりスペインから招聘できなくなった。

・新型コロナウイルスの影響により一時休館となったため、展覧会の開始日を4月25日から6月2日に変更することとなり、また6月末までの関連イベントについても、11回のイベントを全て中止とすることになった。（7月のイベントは開催）

| | |
|---|----------|
| [外部評価] 意見 (評価できる点や課題など) [A:十分に達成 B:概ね達成 C:達成に至らず] | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・休館などをのりこえ、パシェの音響彫刻を再現し、体感できる試みになっていた。 音と造形の関係を探るといふ、厳しい制約のもので作品群である。展覧会はその結果を、やはり音と造形でみごとに提示してみせていた。デリケートな作品ゆえの、部分的開放ではあったが、観客の満足は十分に達成できていたように思う。 ・復元できたことと、作品の趣旨である音響彫刻としての面も色々なメディアで紹介されている点は評価できる。コロナ対策による関連イベントの中止は残念であった。 ・コロナ禍がなければ、イベント性のある企画として、よりアピールできただろう。作品の保全と演奏実施との関係について、美術館としての考慮が求められる他機関との協力関係も成果のひとつだろう ・国内に存在するパシェの音響彫刻を一堂に集め、岡本太郎に新しい角度からアプローチした、意欲的な企画。新型コロナウイルスの影響により、展覧会開始が遅くなり、行えなくなったプログラムもあったが、そうした状況の中でも可能な取り組み、特に VR や動画の HP での公開は広報効果もあり、A (十分に達成) という評価をしたい。 | A |

| | |
|-----|---|
| 事業名 | ②「高橋士郎 古事記展 神話芸術テクノロジー」展 |
| 会期 | 令和2年 7月23日(日)～10月11日(日) |
| 目標 | 東京オリンピックを見据え、岡本太郎美術館を中心に生田緑地全体で日本最古の古事記を題材に日本文化を再考し、高橋士郎が長年温め、考案した空気膜構造の愛らしいロボットにより古事記の内容をわかり易く楽しさを持って伝える。また美術館の位置する生田緑地内の関連施設と連携し、国内外の人に生田緑地の素晴らしさと岡本太郎美術館、日本民家園、空と緑の科学館の存在を知らせる。また、高橋士郎、岡本太郎の造形性と神話というテーマを通じてその芸術性を探る。 |
| 内容 | 高橋士郎は造形家として1960年代よりコンピュータを使う作品を制作してきたが、1980年代より考案した「空気膜造形シリーズ」は国内外で展覧会を開催し誰にも親しまれるアート作品として知られている。本展は長年高橋が作り続けた「空気膜造形シリーズ」の集大成として、日本の古事記を題材に展開されるものである。また、岡本太郎も出雲神話の「おおらかな行動性」を評価し数多くの神話を題材とした作品を制作している。展覧会では高橋士郎の独自の解釈と造形性の中に岡本太郎と共通する「気宇壮大」を見つけ出し、改めて古事記という日本古来の思想にふれるものである。 |

| |
|--|
| 内部評価(自己点検) |
| [実施状況・成果等] |
| <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍により生田緑地の施設全体として展覧会を展開することを断念し、館内展示と緑地のビクターセンターに限り作品の展示を行った。 |

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 予め生田緑地内で作品の写真撮影を行い、その魅力を伝えるために図録図版として紹介した。 ・ 5月に引き続き、VRによる美術館外観、古事記展の展示室を公開し、自粛ムードの中来館しなくても展示内容をネット上で公開する仕組みを構築した。 ・ 作品の撮影はもちろん作品に触れることを可能とした。会場の出入口に消毒液を配置し、三密と手消毒を徹底して来館者対応とした。 |
| [課題・反省等] |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 今回はコロナにより断念したが、生田緑地の博物館施設が連携した事業を展開することで、各館だけでなく生田緑地の魅力を総括的に市民に伝えることの出来る連携事業を模索していきたい。 |

| | |
|---|---|
| [外部評価] 意見（評価できる点や課題など） [A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず] | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 野外設置ができなかった点は残念だったが、アマビエなど親しみの持てる作品で、子供たちも楽しんでいた。 ・ 空気膜構造というコンピュータ制御のテクノロジー、古事記という民俗学・神話の世界、現代アートという3つのジャンルを横断した作品である。これが岡本芸術と深く通底するという「大発見」がまずあって、それを生田緑地全体で展開してみせるという構想は完璧には実現できなかったものの、館内では十分なインパクトをもって展示することに成功していた。願わくは作家・高橋士郎が、もう少し前に出て欲しかったようにも思う。 ・ 神話とテクノロジーという対極的な視点を強引に結びつけたところにアニメの世界にも通じる奇想天外な面白さがあった。岡本太郎にも古代と現代を結びつける回路があり、大らかな精神は共通している。民家園の協力を得て民家の中に「気膜」を置くのも考えられる。 ・ コロナ禍のため、屋外展示の規模が縮小し、展示室内が主となった。幅広い年齢層にアピールできる内容だった。このユニークな手法が古事記のテーマとなぜ結びつくかについての解説が欲しかった ・ コロナによって、生田緑地の施設と連携し、展覧会を展開するという当初の予定から大きな変更を余儀なくされたが、例年の入場者数に劣ることなく、多くの来場者を惹きつけた。企画展示室が、動く巨大な空気膜彫刻に埋め尽くされた光景は壮観で、訪れた人には大きなインパクトを与えたということ、オンラインで展示を公開する試みなどを評価したい。 | A |

| | |
|-----|--|
| 事業名 | ③「クルト・セリグマンと岡本太郎」展 |
| 会期 | 令和2年10月24日(土)～令和3年1月24日(日) |
| 目標 | <p>岡本太郎(1911-96)に最も影響を与えた芸術家として知られるクルト・セリグマン(1900-62)と岡本との交流を紹介する展覧会。</p> <p>岡本太郎はパリに滞在中の1933年、前衛芸術家の団体アプストラクシオン・クレアシオン協会に参加し、多くの前衛芸術家たちと親しく交流した。就中、クルト・セリグマンとは、同協会員の中でも最も親しく、1934年頃のセリグマンの作品と岡本の《空間》《リボン》のシリーズは近似している。1939年、ユダヤ系であるセリグマンはドイツ・ナチスの侵攻を察知し、活動の拠点をアメリカ・ニューヨークへと移し、1940年代以降、セリグマンはパリ時代の芸術家仲間をニューヨークに次々に招いて紹介した。岡本太郎も1953年にニューヨークで個展を開催している。そして、クルト・セリグマンは、ニューヨーク派シュルレアリストの重鎮として活躍した。</p> <p>また、1951年東京都美術館において開催された読売アンデパンダン展におけるマーク・ロスコやジャクソン・ポロックなどの27名のアメリカ人芸術家の出品は、岡本とセリグマンの友情によって実現されたものである。1956年の「世界・今日の芸術展」に出品された8名16点の出品も岡本とセリグマンの友情によって実現した。</p> <p>本展は、岡本太郎の盟友であるクルト・セリグマンの作品を岡本の作品とともに紹介し、岡本芸術の形成過程を探ると共に、両者の友情によって第二次世界大戦後の日本の美術界にもたらされた影響の意義について検証する展覧会である。</p> |
| 内容 | <p>展示構成</p> <p>第1章 クルト・セリグマンと岡本太郎</p> <p>第2章 アプストラクシオン・クレアシオン協会</p> <p>第3章 ネオ・コンクレティスムと国際シュルレアリスト・パリ展</p> <p>第4章 読売新聞社主催「第3回日本アンデパンダン展」(1951年)と朝日新聞主催「世界・今日の美術展」(1956年)</p> <p>第5章 ニューヨーク・ヒューゴ画廊の「岡本太郎展」(1953年)</p> <p>第6章 芸術は呪術であるークルト・セリグマンへのオマージュ</p> |

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

クルト・セリグマン(1900—62)は岡本太郎(1911—96)がパリに滞在していた1930年代以来の盟友であり、セリグマンの油彩作品は国内には二点しか確認できず全貌が把握できないこと、また殊に両者がパリに滞在した頃の作品が国内には1点も所蔵されていないことなどのために、開催が待望されていた。

1930年代のセリグマンの作品を中心に海外から借用し岡本の画風の形成過程を辿ると共に、戦後の日本美術の方向性を決定付けた二つの展覧会(「第3回読売アンデパンダン展」と「世界・今日の美術展」)

への両者の関与を跡付けることを目標とした。

開幕まで半年と迫った四月下旬、緊急事態宣言により、海外からの作品借用が不可能となり、巡回予定館とも協議し、当館は今後の岡本太郎研究の進展の為に複製による展示を決断し、鳥取県立博物館は「岡本太郎展」として別の展覧会の開催を選択された。その結果、充実した二つの展覧会が誕生した。もともとこの段階で展覧会の全てを仕立て直すこととなったことには些か戸惑いもしたのであるが…。

結果として、本展覧会は日本におけるセリグマンに関する唯一の展覧会となり、当該図録はセリグマンに関する日本語で読める唯一の刊行物となった。いつの日か良き時にセリグマンの作品が日本で展示公開されることを願ってやまない。

[課題・反省等]

『美術手帖』2021年1月号に榎木野衣氏による4頁にわたる展評が掲載され、企画自体は高く評価され、インパクトもあった。一方、複製による展示は「モノ」を見せる場としての美術館・博物館のあり方自体を問われることであり、緊急事態宣言下であるとはいえ、慎重を要する課題である。複製のみならずヴァーチャルリアリティも含めて、活用の許容範囲と効果的な活用法など、コロナ禍の美術館・博物館の展示活動における今後の課題であると考えられる。

[外部評価] 意見 (評価できる点や課題など) [A:十分に達成 B:概ね達成 C:達成に至らず]

・長年にわたる研究成果が見られ、岡本とセリグマンとの交流、不明だった事実など展覧会で物語を読むように見られた。

・クルト・セリグマンの全貌を、パリのアブストラクシオン・クレアシオン、ニューヨークのシュルレアリスム、読売アンデパンダン展という3つのアングルから解き明かした、わが国で初めての展覧会となった。これは当館だけではなく、日本美術界全体にとっても、きわめて大きな成果だったといっていよう。

・二人の作家の影響関係を見ることができる好企画だった。複製は美術館の趣旨からは逸れる面があるが、参考資料として割り引いて見れば、次のステップのためにも開催は妥当であった。

・調査の成果が結実したユニークな展覧会。

・セリグマンの美術史的位置づけは本展の反響から生まれるかもしれない。巡回できなかつたのは残念だが、鳥取での岡本太郎のアピールは実現した

・岡本太郎とセリグマンの関係とそれが日本の美術界にもたらした影響の意義は検証することができたと思う。また、海外からの作品借用ができなくなったという非常事態にも、複製を展示するという対応を取り、来場者にセリグマンの表現を伝える意欲は伝わったと考える。

A

| | |
|-----|---|
| 事業名 | ④「第24回岡本太郎現代芸術賞（TARO賞）」展 |
| 会期 | 令和3年2月20日（土）～4月11日（日） |
| 目標 | 「岡本太郎現代芸術賞」は、岡本太郎の精神を継承し、自由な視点と発想で、現代社会に鋭いメッセージを突きつける作家を顕彰するため設立された。今年で24回目をむかえる本賞を通し、21世紀における芸術の新しい可能性を探り、意欲的な作品を紹介する。 |
| 内容 | <p>本年度は、616組の応募があり、24名の作家が入選。最終審査の結果、岡本太郎賞1名、岡本敏子賞1名、特別賞5名が選出された。</p> <p>岡本太郎賞：大西茅布《レクイコロス》</p> <p>岡本敏子賞：モリソン小林《break on through》</p> <p>特別賞：植竹雄二郎《Self portrait》、牛尾篤《大漁鯖ン魚》、小野環《再編街》、唐仁原希《虹のふもとは宝物があるの》、浮遊亭骨牌《浮遊亭 κ ο ι λ ι α》</p> <p>入選：東弘一郎、AYUMI ADACHI、袁方洲、太田琴乃、かえる かわる子、加藤立、金子朋樹、黒木重雄、さとうくみ子、許寧、園部恵永子、唐仁原希、ながさわたかひろ、西野壮平、原田愛子、藤田朋一、みなみりょうへい、山崎良太</p> <p>関連イベントとして、来場者による人気投票、来場者から作家への「お手紙プロジェクト」を実施。</p> |

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

今年度の太郎賞は、終始コロナウイルスの影響の中で創意工夫を行いながら、準備を進めるという形で実施した。感染拡大防止の観点から、従来の郵送申請に加えてオンラインからも応募受付を行ったことで、応募者数は増えている。展示設営における三密を避けるため、設営日数を従来の2日から、搬入作業も含めて8日に広げて作業を行った。内覧会・レセプションも中止としたが、プレス関係者向け内覧会と授賞式は行ったが、広報効果は大きかった。

[課題・反省等]

コロナウイルス対応から行ったオンライン申請だが、人数的には150名ほど増えたものの、応募書類の情報量の薄さが目立ち、事務局側の業務量増加もあり、継続については今後の懸案課題である。展示設営作業を分散して行ったことについては、作家の安全面などメリットが多い一方で、運営側の負担も大きく、運営方法については検討の余地がある。

[外部評価] 意見(評価できる点や課題など) [A:十分に達成 B:概ね達成 C:達成に至らず]

・コロナでの準備等大変な中、社会の空気感をよく表した賞と展示になっていた。オンラインでの試みも今後の課題や展開に繋がるだろう。

・今回は、相変わらずインスタレーション系の作品が主流を占めるなか、加藤立、山崎

A

良太などが作品を積極的に社会へ投げ返そうとする動きをみせて、大いに展示を盛り上げていた。当展の見所のひとつである、サブカルとの関係性にも新たな変化が呼びこまれる可能性を感じさせる、まことに意欲的な内容であったと思う。

・今回は公募展にも出している若者の力作があったり、詩的な映像作品があったり、マンネリ化の中でも新しい動きが見られた点を評価する。いつものように元気な展覧会となった。

・一人分のスペースが大きいせいか、同じものをくりかえす、ユニットを連続して並置することで空間を埋める展示が常に多く、ややマンネリの印象が生じる。

・TARO 賞のブランドを確立させたことにより、コロナの影響を直接に受ける中で、多くの応募者を集め、審査の結果、高校生が岡本太郎賞を受賞するなど、若い世代にもアピールする新たな地平を開いたことを評価したい。また、コロナの中、工夫をしながら準備を進め、密を避け、展示設営を行うなど、柔軟な対応で展覧会を実現したマネジメント面も評価したい。

(2) 常設展

| | |
|-----|--|
| 事業名 | ①「太陽の塔への道～太陽の塔は生命の樹だった」展 |
| 会期 | 令和2年6月2日(火)～10月11日(日) (※会期開始は4月16日から変更) |
| 目標 | 1970年に大阪万博の為に制作された《太陽の塔》は、岡本太郎による最も著名な作品である。岡本が同作品に込めた意図に関しては、いくつかの言説が提示されてきたが、いずれも客観的で明確な根拠・証拠が全くなく、思弁的ではあっても実証的であるとは言い難いのであった。当館所蔵の岡本旧蔵欧文書籍の研究成果により、岡本がミルチャ・エリアーデ(1907-1986)の伝説初版本6冊を熟読していたことが明らかになり、岡本の創作活動への影響関係が明確になってきた。《太陽の塔》もエリアーデの著作、特に『シャーマニズム』と『イメージとシンボル』の影響が確認できる。本常設展では、実証的な観点から、岡本太郎が《太陽の塔》に込めた意図を紹介する。 |
| 内容 | <p>① 岡本太郎の《太陽の塔》は思い付きで造られたのではなく、岡本の中に持続的に存在していた図像「生命の樹」が表出されたものであることを紹介する。</p> <p>② 岡本による《太陽の塔》に関する公式記者会見の内容を年表形式で紹介する。</p> <p>③ 《太陽の塔》の思想的背景となった岡本旧蔵のミルチャ・エリアーデの書籍も展示する。</p> <p>④ 岡本敏子によって記録写真に付された「生命の樹を象徴」のメモのある写真も展示する。</p> |

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

コロナウイルス感染拡大防止のための緊急事態宣言が発令されたことにより、予定した会期が変更となり、10月11日まで延長して開催することとなった。

《太陽の塔》に関する最新の研究成果を反映し、好評を得ることができた。

一平・かの子コーナーに展示した紙による作品の展示期間が長くなりすぎたことは、作品保存の観点から、反省すべき点であった。

[外部評価] 意見 (評価できる点や課題など) [A:十分に達成 B:概ね達成 C:達成に至らず]

・太陽の塔が生命の樹そのものだったと展示から伝わってきた。

・岡本太郎は、いわゆるモニュメント作品に特異な情熱と才能をみせる人として広く知られている。そのなかでも、最も知られた代表作ともいえるべき「太陽の塔」の制作プロセスを、「生命の樹」に遡って検証していった、きわめて質の高い試みといってよいだろう。

・「生命樹」という思想は、古代は勿論、現代でも人間の思考の底流に流れている水脈である。アヴァンギャルド岡本太郎もそうした水脈の中で万博という舞台にモニュメンタ

A

| | |
|--|--|
| <p>ルな造形物を必要として作った。「モノ派」以降素材論を見直す若い作家の動きが太郎の大きな思想に追いついたということか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・内容は良いと思うが、サブタイトルのつけ方に工夫があったらよいと思う。本院の言葉などを引用か。 ・太郎を語る上で欠かすことができない太陽の塔をテーマにし、コロナ禍の中で、生命力を感じさせる展示内容だったことが来館者アンケートから伺えたことからこの評価とした。 | |
|--|--|

| | |
|-----|--|
| 事業名 | ②「うちの中の岡本太郎」展 |
| 会期 | 令和2年10月15日(木)～令和3年1月24日(日) |
| 目標 | <p>岡本太郎の制作活動の根底には、「芸術は大衆のもの」という考えがあった。芸術は暮らしの中でこそ活かさなければならぬと考えていた太郎は、多くのインダストリアル作品を制作した。</p> <p>太郎が生前に制作した日用品やグッズのみならず、彼の没後にも引き続き多くの岡本太郎グッズが生み出されている。作品のみならず本人もそのモチーフとなるなど、これほど多くのグッズが制作されている作家は他に類を見ず、我々は今でも身近に岡本太郎とその芸術性に触れることができる。</p> <p>自粛や在宅を求められる今、暮らしの中で楽しめるアートをコンセプトにした展示として、太郎が生前に手掛けたインダストリアルデザインと、死後に作られたグッズを中心に紹介する。展示を通して、生活の中で生きる太郎の芸術を紹介したい。</p> |
| 内容 | <p>油彩《森の掟》《海辺》《犬》など</p> <p>彫刻《誇り》《河童像》など</p> <p>インダストリアルデザイン《まどろみ》《顔のグラス》《水差し男爵》など</p> <p>グッズ(太郎作品のフィギュア、太郎デザインのスニーカー、ジャージなど)</p> <p>イベント(仮)「蘇るVR太陽の塔 ver.3」</p> <p>太陽の塔内部・外観をVRで観覧するイベント。内部は地下空間も再現予定。</p> <p>日時：令和2年11月7日(土)～11月22日(日) 毎週土日のみ開催 11:00～16:30</p> <p>協力：日本工業大学</p> <p>※感染症拡大状況により、VR映像を動画サイトにアップロードして配信する方法も検討。</p> |

| |
|--|
| 内部評価(自己点検) |
| [実施状況・成果等] |
| <p>コロナ状況下にあつて、家の中で楽しめるアイテムを中心に作品・資料を展示した。</p> <p>身近な芸術作品という点で来館者に好意的に受け入れられたこと、また、特別なイベントは行えない中だが、大学連携事業として、日本工業大学のVR太陽の塔の映像公開やギャラリートークを頻繁に行い、</p> |

| |
|---|
| 来館者に直接語り掛けることに重点を置いた。 |
| [課題・反省等] |
| 岡本太郎の美術館であることを再認識し、作品だけでなく岡本太郎に関わる資料を収集していくことは不可欠なことだと思う。研究施設としての美術館業務として忘れずに今後も継続していきたい。 |

| | |
|--|----------|
| [外部評価] 意見 (評価できる点や課題など) [A:十分に達成 B:概ね達成 C:達成に至らず] | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ なつかしいグッズなど楽しめた。グッズ収集は意義があると思う。 ・ 岡本太郎の作品をみていくと、椅子やソファ、家具など通常の美術家があまり手がけない分野の作品が多いことに驚かされる。この常設展は、そうした建築からサブカルにまで広がる関心に焦点を当てている。デザインの傾向もモダニズム、シュール、土俗性と幅広く楽しめる趣向となっている。 ・ 岡本太郎関連の資料として収集と展示は大事である。 ・ 岡本家のストーリーはいろいろな方法で示していけそうである。 ・ コロナでステイホームが呼びかけられていたことにタイムリーに呼応する展示で、来館者評価にもあったように、太郎の新しい面を紹介することができていたことを評価したい。 | A |

| | |
|-----|--|
| 事業名 | ③「岡本太郎の旅」展 |
| 会期 | 令和3年1月28日(木)～4月11日(日) |
| 目標 | <p>岡本太郎は多くの旅の中で、民族学的な視点から、日本や世界の文化とその土地に暮らす人々の生命力の源流を探った。1957年から66年には日本各地を巡り、その取材旅行を元に『日本再発見—芸術風土記』をはじめ多くの著作を執筆した。また、1963年にはメキシコに初めて訪れ、それを機に世界を巡った記録を『美の世界旅行』として刊行した。</p> <p>岡本は取材先でいつも一眼レフカメラを持ち歩き、自身で撮影した写真の多くを著作に掲載した。岡本の捉えた風景は色褪せない新鮮さを持ってその土地の活力を伝えてくる。</p> <p>「世界ととけあうこと、それが旅である」と述べた岡本の旅と芸術に触れる機会となることを願い、本展では岡本が主に取材で訪れた旅先を辿りながら、写真を中心に、同時期に制作された作品、取材旅行をもとに執筆した著作などを紹介する。</p> |
| 内容 | <p>●出品作品・資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 写真：秋田・岩手・京都・大阪 他 (1955、57年)、沖縄 (1959、66年)、高野山・恐山・広島 他 (1955、62-63年)、メキシコ (1967年)、韓国 (1977年)、インド (1972年) ・ 油彩：《森の掟》《装える戦士》《旅立ち》《飛ぶ眼》《失われた記憶》《千手》《訣別》他 ・ 彫刻：《まつり》《太陽の塔》《こどもの樹》《リョウラン》《河童像》《女神像》他 ・ ドローイング：《反世界》《訣別》 <p>インダストリアルデザイン、陶、一平・かの子作品、資料 (民芸品、著作、カメラなど) 他</p> |

| |
|--|
| 内部評価(自己点検) |
| [実施状況・成果等] |
| 取材旅行や趣味の旅など岡本太郎の「旅」に焦点を当てた常設展。取材旅行で撮影した写真を中心に、岡本が好んで行った場所や宿、店などもパネルや地図で紹介。岡本が旅した場所を辿れるよう地図パネルを合わせて展示した。ショップと連携し、岡本が撮影した長崎の「ごまぱん」や秋田の銘菓「炉ばた」などを関連商品として販売し、好評を得ている。隔週でワンポイントトークを開催。(計 5 回予定) |
| [課題・反省等] |
| 40 点ほどの写真の額装が必要となったため、今後写真をまとめて展示する際は業者への委託も視野に入れて展示準備を行いたい。また、第一室と二室を繋ぐ廊下の照明が暗く、パネルの文字が見えづらいつの声があり、今後は文字サイズを大きくするなど工夫して対応していきたい。 |

| | |
|---|----------|
| [外部評価] 意見 (評価できる点や課題など) [A : 十分に達成 B : 概ね達成 C : 達成に至らず] | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・これまでと違い旅そのものに焦点が当たり、旅ができない今だからこそ楽しめたり、岡本の旅が身近に感じられた。 ・岡本太郎の活動を、彼の活発な旅行からみていこうとした試みである。世界各地で撮影された写真、紀行文、記録データなどがやや雑然としたままに並べられた。その辺りは今後、本格的な企画展に格上げして、発表されていくものと期待している。 ・太郎はいつも先を歩いていると思わせる。 ・「旅」をテーマにしたことで、岡本太郎の眼と思考を、彼とともに旅をしているような気持ちで追体験することができる展示となっていた。太郎が制作した油画と、彼が撮影した写真や各地で集めた民芸品が連携した展示は、貴重な鑑賞機会を提供したと評価できる。 | A |

2 資料収集・整理、調査研究

| | |
|-----|---|
| 事業名 | 資料収集・整理、調査研究 |
| 目標 | 岡本太郎・一平・かの子に関連する資料を収集する。 |
| 内容 | 岡本太郎と関連作家の資料の収集。 岡本可亭・一平・かの子およびその関連作家の資料を収集する。 岡本太郎没後に制作された関連グッズ等も収集する。 |

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

2020年度 購入資料

1. 荒川修作《Is as It: Blind Intention IV》

エッチング・紙、1982-83年、1点

¥100,000 (税別)

2. 荒川修作《Is as It: Blind Intention V》

エッチング、アクアチント、手彩色・紙、1982-83年、1点

¥100,000 (税別)

小計 ¥200,000・・・①

消費税 ¥20,000・・・②

合計 ¥220,000・・・①+②

業者： 株式会社名古屋画廊

本年度は、コロナ対策の機器等の緊急購入の関係で、上記2点の購入とした。

[課題・反省等]

今後とも、岡本一平・かの子・太郎の作品資料および関連作家の作品資料等、少しずつでも購入を継続していきたいと考える。

[外部評価] 意見 (評価できる点や課題など) [A:十分に達成 B:概ね達成 C:達成に至らず]

・多方面の収集は難しいのだろうが、荒川修作の作品が拝見したい。
 ・かつて「岡本太郎の7人の鬼子」という展示があった。今回そのなかにも含まれていた荒川修作のエッチング作品が収蔵されることとなった。両者の立体的、宇宙的広がりを見せる世界が、作品の形で提示できるチャンスを獲得したことを高く評価したい。
 方針をぶれさせないで続ける。
 ・岡本太郎のグッズ収集は強調されていたが、面白いとは思うものの、補完的なものではないだろうか。個人美術館であるゆえに、関係する他作家の作品があったほうが今後の展開が数一図になりそう。
 ・コロナ対応に関わる変更により影響は受けたが、太郎に関連した作品購入を行えたことを評価したい。

B

3 作品の保存・修復、貸出

| | |
|-----|---|
| 事業名 | 作品の保存・修復、貸出 |
| 目標 | 所蔵作品・資料の状態把握に努め、当館での展示に支障が生じないよう貸出の調整を行う。作品・資料の保存・管理業務を定期的に行い、適切な処置を施し、館内の良好な環境の維持に努める。 |
| 内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・岡本太郎作品を中心に、当館で所蔵する作品・資料の保存及び作品の状態を考慮した作品・資料の貸出を行う。 ・作品調書整備、作品修復業務、くん蒸業務など作品の保存・管理業務を定期的に行い、適切に処置する。 ・環境調査、酸アルカリ調査、温湿度調査、収蔵庫とその周辺の清掃作業など定期的に行い、館内の良好な環境を維持する。 |

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

[作品貸出]

- ・岡本太郎《太陽の塔》を「開館 50 周年 超・名品」展（会期：令和 2 年 4 月 11 日～6 月 7 日※コロナの影響で 6 月 2 日～6 月 7 日に変更、会場：兵庫県立美術館）に貸出。
- ・大辻清司 写真 3 点を「生誕 100 年 ロボットと芸術」展（会期：令和 2 年 7 月 18 日～9 月 13 日、会場：苫小牧市美術博物館）に貸出。
- ・岡本太郎作品 11 点（油彩）を「岡本太郎展 太陽の塔への道」（会期：令和 2 年 7 月 18 日～9 月 6 日、会場：秋田市立千秋美術館、令和 2 年 12 月 19 日～令和 3 年 3 月 7 日、会場：新潟県立万代島美術館に巡回）に貸出。
- ・岡本太郎撮影写真 5 点を「デビュー 50 周年記念 諸星大二郎展 異界への扉」（会期：令和 2 年 11 月 21 日～令和 3 年 1 月 17 日、会場：北海道立近代美術館 他 4 館を巡回）に貸出。
- ・北代省三作品、資料を貸出予定だった「生誕 100 年記念 北代省三・山崎英夫（仮）」展（会期：令和 2 年 12 月 5 日～令和 3 年 1 月 17 日、会場：新居浜市美術館）については、コロナの影響により中止。
- ・岡本太郎作品（写真、油彩、彫刻 他）、クルト・セリグマン作品 17 点（版画）を「生誕 110 年 岡本太郎一パリから東京へ」展（会期：令和 3 年 2 月 11 日～3 月 21 日、会場：鳥取県立博物館）に貸出。

[作品修復]

岡本太郎の油彩作品 10 点を修復。

[課題・反省等]

- ・今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため緊急事態宣言が発令されたことにより、会期の変更や開催を中止する展覧会があった。また大規模な岡本太郎展が 3 つ開催されたことにより、作品の調整が大変な年であった。

| [外部評価] 意見（評価できる点や課題など）[A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず] | |
|--|-----------------|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 展覧会の中止は残念だった。 ・ 2020～2021 の美術館は、コロナ禍の影響と対峙する運命を背負わされている。そうしたなか、当館の美術館管理活動は、自治体と指定管理者の能力がうまく噛み合い、効果的な実績を挙げられたと思っている。 ・ 貸出作品からも太郎の多面性が分かってくる。 ・ コロナ蔓延防止のため、予定が変わった展覧会がたくさんあった。鳥取での成功を受けて、地方で同様の展覧会を行うことも考えられる ・ コロナ禍の中で起きた会期変更や、太郎作品の貸出依頼に、安全に問題なく対応した点を評価したい。 | <p>B</p> |

4 普及企画

| | |
|-----|---|
| 事業名 | 普及企画 |
| 目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・学校教育と連携し、学校現場の実情や、要望を踏まえた鑑賞プログラムにより教育普及活動を推進する。 ・近隣の大学、専門学校、幼保・小中高等学校、地域商店街などと連携した事業を行い、地域との交流を深め美術館事業の活性化につなげる。 ・子どもから大人まで幅広く参加でき、美術や岡本太郎芸術に親しめるイベント、ワークショップを開催し、「多くの人に開かれた美術館」というイメージの定着を図るとともに、より地域に根ざした芸術活動の中心的役割をはたす。 |
| 内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・学校等の団体見学、校外授業のカリキュラムに応じたガイドや鑑賞活動を行う。 ・教育機関で活用する教材の開発や貸出、活用例の紹介、出張授業を行う。 ・教育関係研究会、研修会等における講師の招聘を通じてより多くの教育機関と連携、協働した美術館活動を行う。 ・大学生、高校生をボランティアとして美術館イベントに参加させるとともに、自らが考え、すすんで行動する自主性を重視した活動を行う。 ・幅広い層の来館者に対応した体験型イベントや年齢に応じたワークショップなどを開催し、来館者のニーズに沿っていく。 ・教育普及を目的とした展覧会を開催する。 |

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

《教育プログラム》(2020.2.1 現在)

団体見学

学校団体や教育機関による鑑賞学習やグループ学習を、対象年齢や学習目的に応じて先生と話し合いながら行うもの。今年度は例年同様に、こどもの樹コース(ワークシートを手がかりに個人またはグループで鑑賞)、森の掟コース(スタッフによる対話型鑑賞)等に分け、鑑賞プログラムの充実を図っていたが、新型コロナウイルスの流行により、見学を予定していた学校は中止となった。現在は、感染症対策を踏まえた鑑賞プログラムを検討し、人数を半数にし、展示室での鑑賞時間を短縮する形で、団体の受入れを始めている。活動内容も変更し、スタッフによる対話型鑑賞を屋外作品で行い、展示室内ではワークシートを使用して、個人鑑賞を行っている。

<今年度見学団体> (2021.2.1 現在)

| | | |
|---------|-------|--------|
| 幼稚園・保育園 | 7 団体 | 93 名 |
| 特別支援学校 | 1 団体 | 15 名 |
| 小・中学校 | 27 団体 | 2464 名 |
| 高校・大学 | 6 団体 | 145 名 |
| その他 | 1 団体 | 15 名 |

<R 1 年度>(2020.2.1)

| | | |
|---------|-------|--------|
| 幼稚園・保育園 | 4 団体 | 133 名 |
| 特別支援学校 | 11 団体 | 174 名 |
| 小・中学校 | 52 団体 | 5751 名 |
| 高校・大学 | 20 団体 | 581 名 |
| その他 | 8 団体 | 142 名 |

職場体験(0 校)

中学・高校生に美術館の運営についてその目的や内容を幅広く学んでもらうための活動である。学芸員、教育普及、施設管理、監視・受付、ミュージアムショップの仕事等を体験する。今年度は 8 月に複数校

から職業体験中止の連絡があり、未実施である。

教材貸出

岡本太郎紹介ビデオ・DVD、作品をプリントしたカード（A5 サイズ・A3）、岡本太郎の「遊ぶ字」をプリントしたカードを貸し出している。下見の際、貸出教材の紹介を必ず行い、それらを活用した事前学習を勧めている。見学を中止した保育園や学校から教材貸出の依頼があった。また、県外からの依頼も増えている。例年は作品を A5 サイズにプリントしたアートカードの貸し出しが多いが、今年度は接触感染を避けるため、A3 サイズにプリントしたカードの貸し出しを希望する学校が多い。

出張(2校)

図工・美術科における鑑賞活動として、また異学年交流によるイベント、ワークショップとして、学校と美術館と一緒に鑑賞プログラムをつくり、実施する。

《普及イベント》

＜TARO 鯉にいどむ！2020 ラゾーナ＞ ＊中止

内 容 恒例となった出張ワークショップ「TARO 鯉に挑む！」を川崎駅に隣接しているラゾーナ川崎プラザのイベント会場で行うもの。昨年同様準備を行っていたが、今年度は新型コロナウイルスの影響で中止となった。

場 所 ラゾーナ川崎プラザ イベントスペース

料 金 無料

＜TARO 鯉にいどむ！2020＞ ＊中止

ワークショップ日程 令和2年①4月19日（日）、②25日（土）、③26日（日） 13:00～15:30

作品展示日程 令和2年5月2日（土）～5月6日（水振）

内 容 今年で8回目になるイベント。毎年実施している恒例イベントで、常設展示や屋外に展示している《TARO 鯉》を鑑賞し、アトリエで思い思いの鯉のぼりを制作し、母の塔広場に展示する。

場 所 創作アトリエ、常設展示室、ギャラリースペース、母の塔前広場

料 金 無料（要観覧料）

＜こどもの樹をつくろう！＞ ＊中止

ワークショップ日程 令和2年5月3日（日祝）～5日（火祝） 13:00～16:00

作品展示日程 令和2年5月3日（金）～5月31日（金）

内 容 今年で3回目のイベント。《こどもの樹》には、個性豊かな顔が並ぶ。こどもの樹の顔で作った塗り絵と自由に描ける紙を用意し、一人一人が自由に顔を描いて《こどもの樹》を作る。

場 所 ギャラリースペース

| | |
|--|---|
| 料 金 | 無料 |
| <p><はいはい&よちよち美術館ツアー> *中止</p> | |
| 日 時 | ①令和2年4月8日(水) ②5月13日(水) ③6月10日(水) 10:30~11:30 |
| 内 容 | 親子と一緒に鑑賞を楽しむことで、親子のコミュニケーションを図ったり、小さな子でも無理なく美術館の雰囲気を味わってもらったりすることができる鑑賞会。 |
| 場 所 | ガイダンスホール～常設展示室 |
| 対 象 | 3か月～3才の幼児とご家族 先着10組 |
| 料 金 | 無料(要観覧料) |
| <p><TARO切り絵></p> | |
| 日 時 | 令和2年7月23日(木祝) ①10:00~11:00 ②13:30~14:30 |
| 内 容 | 「どこでも TARO アトリエ」で公開した「TARO 切り絵」を制作した。《太陽の塔》や《子どもの樹》の顔を切り絵にした。子どもも大人も夢中になって制作に取り組んでいた。作った切り絵をラミネートし、夏の季節にふさわしいコースターづくりも行った。 |
| 場 所 | 常設展示室、ガイダンスホール |
| 講 師 | 普及企画 |
| 料 金 | 無料 |
| 参加人数 | ①10名 ②10名 (先着順/電話受付) |
| <p><夏休み!子どものための美術館探検2020></p> | |
| 日 時 | 令和2年8月1日(土)～16日(日) 9:30～17:00 |
| 内 容 | 小中学生が、自主的に美術館を鑑賞する手助けになるよう、“美術館探検手帳”を常設展示室入口に設置。常設展示室の壁にある《遊ぶ字》や、太郎のエピソードを踏まえた作品鑑賞、作品を守るための美術館独自の機械など、様々な視点から美術館や作品を観られる内容にした。参加者には《太陽の塔》紙版台紙や特製《森の掟》シールなどをプレゼントした。 |
| 場 所 | 常設展示室 |
| 料 金 | 無料 |
| 参加人数 | 608名 |
| <p><美術館裏探検></p> | |
| 日 時 | 令和2年8月10日(月祝) ①11:00～11:20 ②13:30～13:50 |
| 内 容 | 普段見ることの出来ないバックヤードの一部を公開する子ども限定のイベント。第一収蔵庫、第二収蔵庫、大型エレベーター、搬入口、キャットウォークなどを探検しながら、美術館がどのように作品を保管し展示しているのかについて話した。普段は入れ |

| | |
|-------------------------------------|--|
| 場 所 | ない場所にキョロキョロ、ワクワクしている子ども達の様子が見られた。 |
| 対 象 | 常設展示室、バックヤード |
| 料 金 | 小学生以上 |
| 参加人数 | 無料 |
| | ①9名 ②10名 (先着順/電話受付) |
| <p><TARO ビーズ刺繍></p> | |
| 日 時 | 令和2年8月22日(土) 13:30~15:00 |
| 内 容 | 「どこでも TARO アトリエ」で公開した《太陽の塔》の顔をモチーフに「TARO ビーズ刺繍」を制作。制作の難易度から参加対象を大人向けにし、身近に太郎作品を取り入れてもらえるようブローチに仕立て、様々な方法で作る楽しみも感じてもらった。 |
| 場 所 | 常設展示室、ガイダンスホール |
| 対 象 | 大人(針と糸の扱いに慣れた方であれば、どなたでも参加可) |
| 講 師 | 普及企画 |
| 料 金 | 500円+要観覧料 |
| 参加人数 | 10名 (先着順/電話受付) |
| <p><神話に住むひとびと></p> | |
| 日 時 | 令和2年9月20日(日) 10:00~12:00 |
| 内 容 | 岡本太郎の《明日の神話》は、何を訴えかけているのか学びながら、思い思いに神話に出てきそうな、不思議なキャラクターを制作しました。作品にこめられた思いを感じるために、展示室で《明日の神話》の登場キャラクターの表情をスケッチし、制作では、絵具のデカルコマニーやたらし込みなどでさまざまテクスチャーを作り、絵具の表情の中から想像を膨らましキャラクターやそのパーツを探し出し、組み合わせオリジナルの物語やキャラクターを制作した。 |
| 場 所 | 常設展示室、創作アトリエ |
| 対 象 | 小学生以上 |
| 講 師 | 普及企画 |
| 料 金 | 500円 + 要観覧料 |
| 参加人数 | 14名 (先着順/電話受付) |
| <p><みんなでスケッチ ～“太陽”を描こう!～></p> | |
| 日 時 | 令和2年10月4日(日) 10:00~12:00 |
| 内 容 | 第10回キッズ TARO 展に展示する作品を美術館で制作する内容。今回のテーマ“太陽”をテーマにしている作品を鑑賞し、展示室でスケッチをしてから思い思いの“太陽”を描き、岡本太郎の様々な“太陽”への思いや、考えに触れ、子ども達それぞれの“太陽”を考えるきっかけとなった。 |

| | |
|-----------------------------|---|
| 場 所 | 常設展示室、創作アトリエ、ギャラリースペース |
| 対 象 | 中学生以下 |
| 参加人数 | 21名（先着順/電話受付） |
| ＜第10回キッズ TARO 展—テーマ「太陽」—＞ | |
| 日 時 | 令和2年10月24日（土）～11月23日（月祝） 9：30～17：00 |
| 内 容 | 自由な発想で、独創的な作品を作り続けた岡本太郎。その精神を受け継ぎ、子どもの無邪気で自由な表現の場として、第10回目となるキッズ TARO 展を開催しました。今年のテーマは「太陽」のもと、幅広い作品が集まりました。 |
| 場 所 | ギャラリースペース |
| 対 象 | 中学生以下 |
| 応募者数 | 113名 |
| ＜はいはい&よちよち美術館ツアー＞ | |
| 日 時 | ①令和2年9月9日（水）②10月21日（水）③11月11日（水） ④令和3年2月10日（水） 10：30～11：30 |
| 内 容 | 親子で一緒に鑑賞を楽しみ、お子さんの反応を確かめながらお子さんの様子を通して作品をみてもらったり作品を介しての親子のコミュニケーションを図ったり小さな子に無理なく美術館の雰囲気を味わってもらおう鑑賞会を行った。感染症対策のため定員をこれまでの半数の5組とし実施した。 |
| 場 所 | ガイダンスホール、常設展示室 |
| 対 象 | 0～3才の幼児とそご家族 |
| 講 師 | 普及企画 |
| 料 金 | 要観覧料 |
| 参加人数 | ①4組(9名) ②5組(11名) ③5組(12名) ④2組(4名)（先着順/電話受付） |
| ＜文化財ポスター展＞ | |
| 日 時 | 令和3年1月7日（木）～1月24日（日） 9：30～17：00 |
| 内 容 | 神奈川県教育委員会で行われる、文化財保護ポスター展の作品から、川崎市内の中学生による作品を美術館のギャラリースペースに展示した。 |
| 場 所 | 美術館ギャラリースペース |
| 展示点数 | 7点 |
| ＜Taro バースデーコンサート～花ひらく愛のうた～＞ | |
| 日 時 | 令和3年2月23日（火・祝） 13:30～14:30 |
| 内 容 | 岡本太郎は1911年02月26日生まれ。110歳のバースデーを祝って、コンサートを開催。今年は、音楽ユニット“モデスティーナ”によるオペラのプログラム。ドニゼッティ |

作曲 歌曲集「ボジリポの夏の夜」より“**I bevtori**”（よっばらい）や、オペラ「ラクメ」より“花の2重唱”など、華やかな演奏となった。お客さんに楽しんで頂けるよう、太郎さんへのバースデーソングの演奏の際には、手拍子でお客様にも参加いただき、会場が一体となり暖かな雰囲気になった。

| | |
|------|---|
| 場 所 | 美術館ギャラリースペース |
| 出 演 | 楠野麻衣（ソプラノ）、丸尾有香（メゾソプラノ）、藤原藍子（ピアノ）／（藤原歌劇団） |
| 料 金 | 無料（椅子席 35 席は要観覧券） |
| 参加人数 | 椅子席 35 名（事前電話受付）、立ち見 119 名 |
| 協 力 | 昭和音楽大学/株式会社プレルーディオ |

《どこでも TARO アトリエ》

「どこでも TARO アトリエ」は、令和 2 年 4 月に出了れた緊急事態宣言下で、多くの方が自宅で過ごされている時期に、美術館へ行けなくても、自宅で岡本太郎の作品を楽しんでもらえるように始めたコンテンツである。これまで好評だったワークショップなどから、大人でも子どもでも、気軽に楽しめるアイデアを紹介した。緊急事態宣言解除後も、住まいが遠方の方は来館しにくいいため、しばらくの間、「どこでも TARO アトリエ」の公開・更新を続けている。

配信開始：令和 2 年 4 月 19 日（日）～現在継続中

<第 1 弾 みんなで作ろう！こどもの樹>

当館では、GW 期間中、「こどもの日」関連イベントとして、「みんなで作ろう！こどもの樹」を企画していたが、今年度は、「どこでも TARO アトリエ」企画として、自宅で塗り絵をして、オリジナルの《こどもの樹》を制作できるように、作品画像を公開した。

<第 2 弾 《傷ましき腕》を再現しよう>

美術の教科書などでも取り上げられる事が多い、岡本太郎の《傷ましき腕》を再現した。作品を再現しようとする、なんと難しいことか！よく観察して、家にある自分で思いついた材料で工夫して再現するアイデアを公開した。

<第 3 弾 ちょっと手ごわい？ TARO 塗り絵①>

岡本太郎の絵画を、「塗り絵」として楽しむ大人向けのワークショップをこれまで何度か行った。《明日の神話》（中央部分のみ）《クリマ》《記念撮影》の 3 点を初心者向けに、A4 サイズに印刷して使用できる画像を公開した。

<第 4 弾 TARO 鯉に挑む！～ミニチュア TARO 鯉を作ろう！～>

毎年、ワークショップ“TARO 鯉に挑む！”をイベントとして開催し、岡本太郎の作品を鑑賞してから、思い思いに鯉のぼりを作成し、母の塔広場に展示してきた。鯉のぼりに対しての太郎の言葉や、ミニチュア

ュア TARO 鯉の制作方法を公開した。

<第5弾 つくろう！ミニチュア・坐ることを拒否する椅子>

当館の展示作品の中で、実際に座ることができる《坐ることを拒否する椅子》は、子どもたちに大人気の作品。そのミニチュア坐ることを拒否する椅子を身近な材料（紙粘土・ペットボトルのキャップ・絵の具等）で作る、簡単な制作方法を公開した。

<第6弾 おうちで「実験茶会」>

昭和30（1955）年4月3日岡本太郎の南青山の自宅で行われた「実験茶会」は、北大路魯山人や丹下健三などが招待され開かれた。当日は太郎自身による懐石もふるまわれ、形にとらわれない自由な発想の「実験茶会」だった。自分でお気に入りのものに囲まれた「実験茶会」を開いてみるアイデアを公開した。

<第7弾 ちょっと手ごわい？ TARO 塗り絵②>

岡本太郎の絵画を、「塗り絵」で楽しむシリーズの2回目は、難易度の高い《森の掟》《夜》《予感》の3点を公開した。

<第8弾 テキスタイルで遊ぼう！>

2019年度に《プリント服地デザイン》の展示と合わせて“テキスタイルで遊ぼう！”と題して、綿のトートバッグに身の回りのものを使って、ペイントするワークショップを行った。太郎のテキスタイル作品《プリント服地デザイン》と制作風景の写真や、ワークショップ風景、制作方法を公開した。

<第9弾 《月の壁》のモビール>

1957年～1991年に旧東京都庁舎に飾られていた、岡本太郎の壁画《月の壁》をモチーフにモビールを制作した。壁ではなくモビールで再現してみたら…おうちに太郎作品が出現！型紙も一緒に公開した。

<第10弾 切って・彫って・刷ったろー！～版画に挑戦～>

岡本太郎の作品の中から、《子どもの樹》《太陽の塔》《森の掟》を版画にした。紙版画・木版画・ゴム版画で作る、実際のを反転した型紙を掲載した。簡単な版画の制作方法を公開した。

<第11弾 ちょっと手ごわい？ TARO 塗り絵③>

岡本太郎の絵画を、「塗り絵」で楽しむシリーズの3回目は、難易度の高い《重工業》《犬》《戦士》の3点を公開した。

<第12弾 TARO ビーズ刺繍>

《太陽の塔》、《マスク》、《明日の神話》の一部をモチーフに、ビーズ刺繍にした。作品をブローチにして

身に着けてみよう。作り方は《太陽の塔》の顔をモチーフにしたものを公開した。

<第13弾 TARO 切り絵>

1940年代、パリ在住の岡本太郎は、自宅窓に「シュルレアリスム風の紙絵」を貼って楽しんでたと、高田博厚という彫刻家がエッセイに記している。今回は太郎の作品を切り絵にし、簡単な制作方法と《太陽の塔》《子どもの樹》《森の掟》の下絵（一部）を公開した。

<第14弾 オンライン美術館鑑賞～太郎 VR 美術館&ワークシート>

美術館に行きたくてもなかなか行けないという方、学校の鑑賞授業の課題として美術館に行きたいけれど、今年は難しそうだと思われる学校の先生方に向け、ワークシートを活用したオンライン美術館鑑賞を紹介。美術館で使用しているワークシートを公開した。

<第15弾 シャツはファンタジー！>

太郎さんの「シャツはあらゆるファンタジーが可能で遊べる」という言葉をヒントにTシャツにアイロンシートで模様を施し、オリジナルシャツを作ってみましょう！《明日の神話》のモチーフを一部にして、夏を楽しむTシャツの作り方を公開しました。

<第16弾 タイルに見立てて～TARO ちぎり絵～>

太郎さんの作品の中には、モザイクタイルを使ったものが多くあります。旧国鉄神田駅構内に展示されていた《遊ぶ》《花ひらく》《駆ける》などは現在岡本太郎美術館で所蔵しています。今回は折り紙や和紙をちぎってモザイクタイルに見立て、太郎さんの作品に挑戦しています。TARO ちぎり絵を公開しました。

<第17弾 どこでも TARO キッチン①>

太郎さんのオリジナル料理のレシピを紹介。“ひき肉のワンタン包み揚げ”と“えのきだけと納豆のあえもの”を紹介しました。

<第18弾 どこでも TARO キッチン②>

太郎さんのオリジナル料理のレシピ紹介の第二弾。“モンパルナッスのカリフラワーいため”と“たらこのんにくあえ”を紹介しました。

<第19弾 マスク（仮面）を作ろう！>

常設展示室の椅子コーナーやギャラリースペースの上部に太郎さんの《マスク》が展示されています。太郎さんの作ったマスクはどれもとってもユニークです。今回は張り子に挑戦し、自分のマスク（仮面）を作ります。張り子を使ってのマスクの作り方を紹介しました。

[課題・反省等]

今年度は、新型コロナウイルス対応に終始した一年となった。

緊急事態宣言下の時期には、オンラインの情報発信として「どこでも TARO アトリエ」を企画し、休館

から時間をおかず、スピード感を持って情報発信を行った。イベント開催・団体受入れができない時期は、普及企画係全員でコンテンツ制作に取り組むと共に、学校現場へもさまざまなレベルで発信を行い、休校中の自宅学習、休校明けの図工の授業で活用した事例などが確認できた。

夏以降のイベント、団体受入れについては、通常人数の半数を上限とし、感染症対策に配慮した中での実施となった。学校団体の受入れについては、例年以上に学校現場との連絡調整の中で行ったが、通常の倍以上の人的体制と時間を要する形となるため、来年度以降の受入れは、効率化も含めて検討し、一部見直しも行っている。

[外部評価] 意見 (評価できる点や課題など) [A : 十分に達成 B : 概ね達成 C : 達成に至らず]

| | |
|---|-----------------|
| <ul style="list-style-type: none"> ・近年美術館の普及企画課活動のなかでも、子どものワークショップには特別な関心が寄せられている。学校教育と社会のニーズとに間に、大きなギャップが生じているからだと推測される。そうしたなか、当館の「どこでも TARO アトリエ」などの実施は、ますます注目されていると実感する。 ・美術館の活動としては企画展よりも大変な事業だと思う。続けることによって今後の活動にも繋がる。現場に来て、作品に直に触れる喜びを体験することが大事。オンラインでのワークショップはこれからの分野なので引き続き、努力してもらいたい。 ・対面で行うプログラムはコロナの影響を大きく受け、中止せざるをえないプログラムもあったことがとても残念だが、その中で、できる限りの工夫をして学校受け入れを実施したり、教材貸し出しなど来館しなくとも美術体験ができるプログラムを提供したことを高く評価したい。また、夏以降、コロナ対策を行い実施できた普及イベントには、参加者をきちんと集められていることも評価した。 | <p>A</p> |
|---|-----------------|

5 広報活動

| | |
|-----|---|
| 事業名 | 広報活動 |
| 目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナ流行により変動する情勢に対応し、他館の情報収集も行いながら展覧会・開館情報を適正に発信する。緑地内の発信情報を共有し、情報の整合性を維持する。 ・新型コロナによる休館中も有用な情報発信を行い、再開後の入館促進・リカバリを図る。 ・SNS、ホームページ等 WEB 媒体の活用を深耕し発信力を高める。 |
| 内容 | <p>有料広報活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Twitter 広告導入 ・駅貼りポスターの継続実施（都内・首都圏） ・広報誌「TARO ニュース」刊行 <p>無料広報活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小田急・JR・商店街へのポスター配布、川崎駅展示コーナー、市政だより ・東急電鉄川崎市内駅構内へのポスター掲示を継続実施 ・プレスリリースによる新聞・雑誌・WEB への告知 ・会期中主要マスコミへの掲載依頼、取材受付・対応 ・展覧会ちらし・ポスターを他美術館等へ配布・掲示 ・プレス内覧会の実施(感染対策を行ったうえで) ・インターネット活用による広報（美術館 HP、SNS、外部ページへの登録・配信） ※イベント中止情報、休館・再開情報発信、休館期間にホームページの在宅コンテンツ（VR 美術館・どこでも TARO アトリエ）継続発信 ・NHK 日曜美術館出演、ラジオ中継、テレ朝動画番組収録対応 ・登戸駅・多摩区役所・商店街周辺デッキへフラッグ掲示 ・TARO 賞受賞式開催のプレス関係者へのメール発信 ・TARO 賞受賞式、プレス内覧会実施 |

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

- ・悪化するコロナ感染に対応したイベント中止・来館者への呼び掛け・開館・休館情報をこまめに適切な表現で発信し、緑地の他施設と対応情報と発信手法を共有・整理し発信した。
- ・在宅で楽しめる VR、どこでも TARO アトリエを積極的にコンテンツを発信。
メディアに大きな反響を得、NHK ニュース、朝イチ生中継など TV・ラジオ取材を多数獲得した。
- ・有料広告での露出拡大を機にツイッターの発信をカジュアル化しユーザ特性に合わせた。
- ・ツイッターをカジュアルに発信することにより、若い世代の来館者が増えた。

[課題・反省等]

- ・社会情勢を考慮しながら、引き続き若い世代に発信力のある Twitter 発信を強化していく。
- ・来館者アンケートや世代別統計、SNS での反応を分析しながらより効果的な PR に努める。

・メールリリースにも力を入れ、いち早く最新の情報を届ける。

[外部評価] 意見 (評価できる点や課題など) [A : 十分に達成 B : 概ね達成 C : 達成に至らず]

| | |
|---|----------|
| <p>・Twitterなどの活用を意欲的に取り組んでいると思う。</p> <p>当館の広報活動としては「高橋士郎 古事記展 神話芸術テクノロジー」展、「クルト・セリグマンと岡本太郎」展などへの新聞記事が、やや異常といってもいいほどに多かったことが印象に残る。担当学芸員の情熱をしっかりサポートする体制が整っていることは、まことに心強い限りである。</p> <p>・コロナ禍の感染対策に振り回される面があったと思いますが、展覧会情報はこまめな発信が大事。</p> <p>・動画による広報について今後開拓してもらいたい。</p> <p>・コロナ禍にありながら、着実に広報活動を行い、取材・掲載につながっているところを評価する。また SNS 広報 (twitter) にもチャレンジし、若者層へアピールする機会を増やしている点も評価したい。</p> | A |
|---|----------|

6 施設・設備の整備

| | |
|-----|---|
| 事業名 | 施設・設備の整備 |
| 目標 | 開館から 21 年を経過し、建物・設備が老朽化しており、施設の長寿命化及び作品の保全、市民の施設利用の利便性の向上、安全・安心の確保を図るため施設の計画的な更新・補修を行う。 |
| 内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・スプリンクラー設備長寿命化工事 ・空気熱源ヒートポンプ設備工事 ・冷温水ポンプ長寿命化工事 ・メディアセンター空調設備更新工事 ・ガラス壁面遮熱フィルム工事 ・屋外エレベータアプローチ工事 ・男子トイレ小便器更新工事 |

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

今年度は長年の懸念材料であった、館内の空調・温度を管理する冷温水ポンプの全更新を行い、館内の空調の安定化を図ることができた。また同時にガラス壁面に遮熱効果が高いフィルムを張ることで、年々強くなる太陽光の遮断及び遮熱をすることで、館内の空調効率の改善を行った。また、その他緊急修繕として、破損や故障している箇所の工事を実施した。

[課題・反省等]

計画修繕とは別に突発的な工事が増加しており、なるべく早期に修繕箇所を発見し対応することが必要となる。

[外部評価] 意見（評価できる点や課題など） [A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]

・当館は開館以来、すでに 21 年を経過している。いつ思いがけないところから重大事故が発生してきても、おかしくない状況といえよう。素人にはなかなか発見できない兆候を的確に把握し、引き続き厳しく対応していってほしい。

・3 か年計画を作成してはどうか。

・老朽化してきた建物・設備を計画的に丁寧に更新・補修し、安全に作品を鑑賞してもらおう環境を整えている点を評価した。

B